



Title	はじめに
Author(s)	津曲, 敏郎
Citation	サハリンの言語世界 : 北大文学研究科公開シンポジウム報告書, i-ii 津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed.
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/38291
Type	other
Note	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
File Information	00-1_preface.pdf



[Instructions for use](#)

はじめに

本冊子は、2008年9月に北海道大学で開催されたシンポジウム「サハリンの言語世界」における研究発表をもとにまとめた報告書である。シンポジウムでは12件のべ13名の研究発表が行われたが、本書刊行に際して、各報告者に対し、あらたに論文化した原稿を提出してもらった。したがって、口頭発表の時点から多少とも補訂された内容となっている。ただし、原稿の提出が得られなかった2名について、共同発表の1名分については割愛、他の1名については予稿集の原稿を再録するという措置をとらざるを得なかった（再録にあたり、編者が手を加えた部分がある）。その一方で、シンポジウムで発表した以外の関係研究者にも寄稿を呼びかけたところ、2件の応募があり、合わせて収録することができた。シンポジウムでの発表ならびに本書への原稿依頼に快く応じてくださった皆さんに、心から感謝申し上げたい。

シンポジウム開催の経緯について、簡単に記しておきたい。きっかけを与えてくれたのはアレクサンドル・ペヴノフ氏（ロシア科学アカデミー）の来日である。氏がペテルブルグからサハリンへ調査に来られるということを知り、すぐ隣の島までやって来た旧知の友人をそのまま帰す手はない、と津曲が札幌へ誘ったところ、喜んで応じてくれることになった。氏のほうでも日本の多くの研究者仲間と再会して、今後の共同研究について話したいという、強い希望をもっていた。しかし、今回はサハリンでの調査が主たる目的であり、日本滞在は一週間しかとれない。この短い期間で日本各地の研究者を訪ねて回るのは、いかにも能率が悪い。それなら、研究者を札幌に集めよう、せつかく集まるならサハリンの言語をテーマにしたシンポジウムを開催しよう、という運びとなった次第である。呼びかけに応じて予想以上に多くの仲間たちが（しかも自前の旅費で）集まってくれたのは、ひとえにペヴノフ氏の吸引力のなせるわざである。

今回のシンポジウムには、看板にこそ掲げなかったが、もう一点重要な動機が込められていた。サハリンの言語、とりわけウイльта語の世界的研究者であり、また多くの北方言語研究者の指導・育成にあたってこられた池上二良先生（北海道大学名誉教授）は、2008年5月めでたく米寿を迎えられた。公職を退かれてからも、永年のお仕事を著書にまとめたり、ウイльта語の文字教本作成にも積極的にかかわるなど、意欲的な日々を送って来られたが、残念ながら数年前からお身体が思うにまかせず、現在はご自宅近くの老人ホームで奥様の介護を受けながら過ごされている。シンポジウム直前に先生を訪ね、このシンポジウムに先生の米寿をお祝いする意味を込めさせていただくことをご了解いただいた。もとよりご参加いただくことはかなわない状態であったが、若い研究者を含むこのような会が行われることを喜んでくださったと信じている。

シンポジウム当日には、一般聴衆を含む多くの方たちに集まっていただき、きわめて盛会であった。札幌圏以外からの参加者の姿も見え、北海道民にとってサハリンないし樺太への関心が高いことを、あらためて知らされる結果となった。今回のシンポジウムは、基

本的にはサハリン少数民族言語学の専門的議論が中心であり、必ずしも一般の聴衆を意識したものではなく、また時間の制約から十分な質疑も行えなかった。その意味で聴衆の関心と期待に十分応えられたかどうか定かではないが、サハリンの言語世界について、その豊かさの一端は共有してもらえたのではないかと考えている。その豊かさが失われないよう、研究者としてやれること、やるべきことを、各発表者はあらためて胸に刻んだに違いない。本書がその思いをとどめ、広げる契機となれば幸いである。

2009年2月

津曲 敏郎

(北海道大学大学院文学研究科)



シンポジウムの模様